

日本国際飢餓対策機構

飢餓対策ニュース

善い隣り人になって共に生きよう地球家族

2006

11

No.196

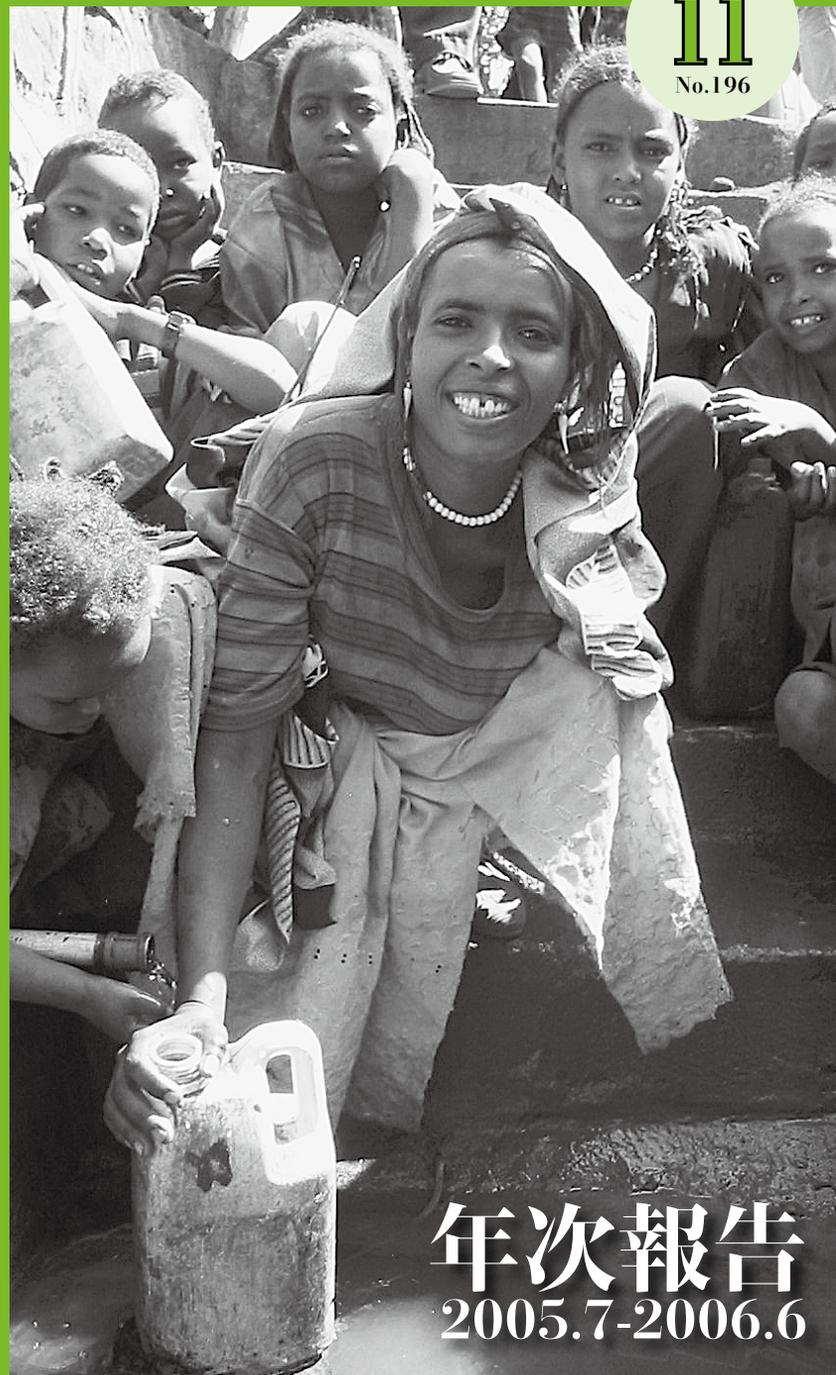
飢餓が原因で、
1分間に17人が亡くなっています。
12人は子どもです。



<http://www.fhi.net/jifh/>

大阪 〒581-0032 八尾市弓削町3-74-1
TEL 072-920-2225 FAX 072-920-2155
東京 〒164-0012 中野区本町5-10-5
TEL 03-3383-7611 FAX 03-3383-7510
沖縄 〒900-0033 那覇市久米2-11-20
TEL 098-868-6347 FAX 098-868-6360
広島 〒731-0103 広島市安佐南区緑井2-21-23安全ビル201号
TEL / FAX 082-831-1214

■ 発行者 堀内 顕
■ 発行所 日本国際飢餓対策機構
■ 郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
※ 支援金は随時受け付けております。



年次報告
2005.7-2006.6

目次

◆ 海外活動	
緊急援助から復興支援へ	
パキスタン地震被災者支援	4
レイテ島地すべり支援、ジャワ島震災被災者支援	5
自立開発協力	
エチオピア／農村自立開発プログラム	6
中華人民共和国／技術のみならず伝えられたもの	8
ペルー／幸福に携わる働き	9
ウガンダ／「新しい価値観」を生きる	10
バングラデシュ／一人一人は高価で尊い	11
世界里親会 子どもたちと共に未来を目指して	12
海外駐在員派遣 共に暮らし、共に考え、共に歩む	14
◆ 国内活動	
オリエンテーション・トレーニング	16
海外ワーク・キャンプ	17
講演会、巡回活動	18
4万2千人の「世界食料デー」	19
愛知万博「地球市民村」の最終月に出展	20
募金活動	21
視聴覚教材	22
◆ 支援活動一覧	24
◆ 決算報告	26
◆ 監査・支援者数	27
◆ パートナー	28
◆ 年間活動記録	29
◆ 日本国際飢餓対策機構とは	30

ごあいさつ

飢餓や貧困と闘う人々のためにこの一年も、惜しみない温かい支援を続けてくださったことを心より感謝いたします。

情報化社会の目覚ましい進展によって、今日では携帯端末一つで世界中の人々といつでもどこでも、自由にコミュニケーションができるようになりました。遠い国の友人とも、あたかもすぐそばで会話をしているかのような錯覚さえ覚えます。地球はますます狭くなったように感じます。しかし、あなたの隣り人の声はあなたの心に届いているのでしょうか。瞬時に見たり、聞いたりすることのできるテクノロジーは有用なものですが、反面それに慣れきってしまうと、じっくりと深く考えることが疎かになりがちです。大切なのちの問題が、リビングルームの一瞬の出来事で終わり、次の瞬間には忘れ去られていきます。

昨年、私たちは愛知県で開催された「愛・地球博」に出展しました。3万4千人をこえる方々に世界の飢餓と貧困の現実を説明し、訴えることができました。その貴重な経験を通して、まだまだ多くの方々が、世界の飢餓や貧困の問題と、自分たちの豊かさが深く関係していることに気付いていないことを再認識させられました。だから、もっともこの問題の真実を伝えて、人々の生き方にチャレンジしていく必要があります。

この一年も皆様からの愛の支援によって、アジア・アフリカ・中米の各地に「愛の使節」を派遣することができました。世界各地で続発する緊急災害に対しても、その度に皆様から温かい支援が寄せられ、スタッフの派遣を含めた緊急支援を続けることができました。また、各種のグループや職場や学校や個人など様々な方法で支援の輪を広げて草の根募金運動を進めていただいたり、各地の事務所に足を運んでボランティアとしてこの働きを応援していただいたことも、大きな力となりました。誰かに知られることもなく、「一人がひとりを助ける」という思いで、地道な取り組みを何年も続けてくださっている方々もおられます。これからも皆様と力を合わせて、世界の飢餓問題の解決に向けた歩みを続けていきたいと願っています。

心からの感謝をもって、ここに一年の働きのご報告をお届けいたします。この報告は皆様の愛の結実です、その一つひとつをご覧いただいて、思いを新たにいただければ幸いです。

飢餓との闘いのため、一人のいのちを救うため、これからも共に考え、共に行動してまいりましょう。この世界に飢餓や貧困や戦争のない、真の平和が訪れる日を祈りつつ。

日本国際飢餓対策機構 理事長 堀内 顕

津波や地震などの自然災害、あるいは難民流出などの緊急事態が起こると同時に、緊急援助活動が動き出します。一刻も早い活動開始と共に、数ヶ月後には復興支援へと移行していく、迅速かつ時宜を得た行動が求められる動きです。

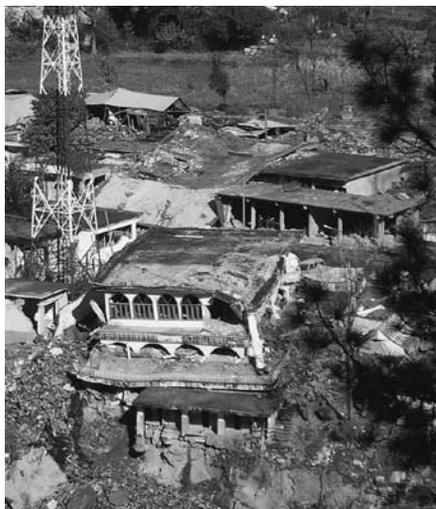
□ パキスタン地震被災者支援

2005年10月8日、パキスタン北東部カシミール地方を襲った地震によって、約300万人の方が被災。国際飢餓対策機構は地震発生の3日後から、カシミール地方の中心都市ムザファラバードに入り、北部のバラコット、ビシアン、パティカなどの地域で医療支援、緊急物資配布（冬用ジャケットや毛布、家庭用品など）、チャイルド・ケアプログラムを行いました。

日本からは、11月22日から12月8日まで竹内緑スタッフと奥村いずみスタッフが、上記プログラムに参加しました。また、3月27日から4月1日まで酒井保スタッフと石田敏隆スタッフが、活動実施状況を視察しました。



各場所
で簡易クリニックを開き、
4日間で108名の患者さんを診る
事ができました。



谷間の町パティカ。土砂崩れで
陸路が遮断され、支援が届き
にくい地域であった。

□ レイテ島地すべり被災者支援

2月17日、フィリピンのレイテ島ギンサウゴン村で大規模な地滑りが発生。国際飢餓対策機構は、避難生活を送る方々に石鹸や洗剤などの衛生用品、家庭用品を配布すると共に、保存のきく缶入りパン10,000缶を、下記の方々の協力で送ることができました。（ニュービジネス協議会、企業革新委員会有志、人間力開発委員会有志、沖縄県企業立地推進課有志、(株)パン・アキモト）



被災者の方々に配布された生活
用品などの支援物資。

□ ジャワ島震災被災者支援

5月27日、インドネシア・ジャワ島中部で地震が発生。国際飢餓対策機構は、現地団体「ラブ・ジョグジャ」と協力し、ジョグジャカルタ行政区内のバンツール県とグヌンキドゥル県で緊急支援を行いました。

日本からは、6月6日～19日まで清家弘久総主事と酒井保スタッフが被災地で活動しました（酒井スタッフは7月25日～8月1日にも現地を再訪）。「ラブ・ジョグジャ」を通して、緊急用シェルター・ボックス（テントや寝袋、水の浄化錠剤、炊事道具などを装備）を50個（約500人分）お届けすると共に、11軒の仮設住宅建設などを支援することができました。



◀協力団体ラブ・ジョグジャ
代表にシェルターボックス
を渡す酒井スタッフ

建設中の仮設住宅

「開発」の中心となるのは、「人」です。その「人」が、自らの尊さを自覚し、自分の潜在能力に気付き、当面する問題の解決を図っていこうとすること、また他の人たちの努力に協力することになること、そのような人が増えていくプロセスこそが、私たちの考える「開発」の内容です。

この一年も皆様のご支援によって、そのような「人」が地域社会に育っていく過程を応援し、支援させていただくことができました。

エチオピア・サシガ 農村自立開発プログラム

エチオピア東部の早魃地帯で飢餓に苦しんでいた多くの人々が、国の移住政策に従って大挙して移ってきた場所がサシガ郡です。

もともと不便な農村地帯であったことから、医療や教育、保健衛生など、政府による公的サービスの整備は不十分でした。そこへ、既存住民のキリスト教徒2万人とほぼ同数のイスラム教徒の人たちが移住してきたため、地域の環境は悪化、また様々な問題や軋轢あつれきが起きていました。

国際飢餓対策機構は、地域の問題に対して、地域住民自身の手で持続可能な開発が行われていくことを願って、地元政府やコミュニティ、地域教会と協働して働きを進めています。「水と衛生」「農業」「教育」を活動の柱に、人々と共に取り組むことを通して、地域になくしてはならない「人」が育っています。

このプロジェクトには初動期間から森田哲也スタッフが携わり、2006年3月、後任の高橋ゆかりスタッフにバトンタッチされました。

フジテレビ「あいのり」との小学校建設共同プロジェクトも実施。完成した学校の前でお祝いする住民たち。



共に働く仲間として

～農村自立開発プログラム（サシガ）～

サシガ郡のペロ地域は人口2,400人のコミュニティです。ここで人々が飲み水を得ることのできる場所は、自然のままの泉だけでした。同じ水場から家畜も飲んでおり、汚染された水を飲まざるを得ませんでした。

国際飢餓対策機構は、地域の人々に労働力を提供してもらって、水施設の建設を始めました。まず泉を保護するために覆いをして、そこからパイプで下流へ水を運び、皆が利用しやすい場所を決めてもらい、そこに水場を作ったのです。また後々の修理や、施設周辺の衛生管理を担当する水委員会も設立してもらいました。住民の一人アリユさんは言います。

「これまで子どもたちは、川にかかった丸太の橋を渡って水汲みに行っていました。特に雨期には、川に落ちやしないか心配でした。しかし今や新しい水源ができたので、子どもたちを安心して送り出せますし、何より水汲みの時間が激減しました。子どもの病気も少なくなるでしょう。今後どんな働きであっても、我々はいつでも国際飢餓対策機構の皆さんに協力するつもりです」。

他村からは「既に自分たちで井戸を掘り始めている。最後のポンプ据付までにかかる費用の一部を助けてもらうことはできないか」との申し出もあり、森田哲也スタッフは「“共に働く仲間”として私たちを捉えてくださることはうれしいことです」と言います。これからもこのような協力関係が強化されていくよう願っています。



水汲みにきた子どもたち。「これからは、水汲みの途中、川にくつを落とすことはないねー。これまでサシガでは、正常に機能する井戸は一本もなく、地域住民の94%は、安全な飲料水を飲む事ができませんでした。」

中華人民共和国・雲南省
竹工芸・指導者育成プログラム

ペルー・リマ
保健衛生プロモーター育成プログラム

技術のみならず伝えられたもの

河南省を皮切りに1986年から20年来続けられてきた「竹工芸指導者育成プログラム」。2006年からは新しく、雲南省昆明市宜良（イーリヤン）県で、15名の訓練生の方々を迎えてのトレーニングがスタートしました。直接的な訓練期間は3週間ほどですが、毎年そのために現地へ赴き、指導を続けてくださっているのは、栃木県の竹工芸家・八木澤さんご一家（父：啓造さん、子：正さん、孫：洋志さん）です。

雲南省は中国最南部に位置し、西側はチベット、ミャンマー、ラオス、ベトナムに接しています。既に同省北部では、中上スタッフ夫妻、星野スタッフ夫妻が地域開発プログラムを進めています。今後も両活動を通して、雲南省の方々の必要に応じていきたいと願っています。

この竹工芸指導者育成プログラムの目的は「自分の成長と共に他の人々の益を願って、仕えていくことのできる人づくり」です。地域で竹工芸作りに長年携わってきた人々の中から指導力のある人々が選ばれ、訓練後には、各自が自分の地域で他の人々を訓練していただくことが願いです。それだけに、これまで八木澤さんご一家が、人々に仕える姿で、高い技術を惜しみなく提供し、作品作りへの情熱や喜び、忍耐を伝え続けてきてくださっていることは、訓練生たちが真の指導者となるために、なくてはならない力です。

訓練生は自分たちで練習を繰り返しながら、来年再び、訓練会で私たちと再会します。一人一人の成長が楽しみです。

* 2006年8月9日、お父様である啓造さん（80才）が天に召されました。長年にわたるご労に心より感謝をいたします。



2006年の訓練の様子。訓練生に編み方を教える八木澤止さん。

幸福に携わる働き

リマ市郊外のスラム地区サン・ファン・デ・ルリガンチョ。劣悪な環境の中で暮らす住民の健康問題に関わっていく人を、同地域の中から育てる働きが、「保健衛生プロモーター育成プログラム」です。「自分たちの隣人が健やかに生きられるように！」熱意をもったプロモーターたちが今日も活動しています。

同地区に住むロサ・エルナンデスさんは、保健衛生プロモーターの一人として労しています。ロサさんは、10年前から家政婦として働きつつ、路上でもキャンディやドーナッツを売って生計を立てています。厳しい暮らしの中ですが、プロモーターとして無償で奉仕しておられます。

保健衛生プロモーターの仕事のベースとなるのは「家庭訪問」。国際飢餓対策機構の専門スタッフと共に定期的に家庭訪問をする中で、地域社会の様々な問題に気付き、何をなすべきかをスタッフと共に考えていきます。時に保健所などとも協力しながら次の行動に移していくのです。学校での健康診断や地域住民を対象にした予防注射、肺結核やデング熱の予防講習会、トイレ啓発、地域清掃キャンペーンなども、そういった課題解決の取り組みの中で行われていることです。

ロサさんは言います。「プロモーターとして働くようになって、私の人生は変わりました。この働きは、身体面だけでなく、子どもや家族や地域社会全体の幸福に関わることが、他の団体の働きと違う点だと思います」。

ロサさんは、家族の中で、地域の中で、「隣人に仕える人」の見本となっています。彼女のような一人一人に感謝します。



家庭訪問をするロサ・エルナンデスさん。

ウガンダ
エイズ・プログラム

バングラデシュ
グループ活動プログラム

「新しい価値観」を生きる

国際飢餓対策機構は、ウガンダの現地 NGO「ファミリーライフ・ネットワーク（以下 FLN）」と協力しながら、性や結婚に関する若者たちの価値観が変化することにチャレンジし、「エイズから守られた世代」を生み出す努力を続けています。

FLN の動きのベースは、青少年たちの行動が変えられていくためのチャレンジです。彼らの行動が変わるためには、性に関する正しい知識が伝えられることが大切です。それと同時に、青少年たちが「貞節、つまり「結婚前あるいは婚姻外での性交渉を拒否する」ということは未婚者であれば将来のパートナー、既婚者であれば現在の伴侶への『誠実』を表すものだ」という価値観を、真に生きるようになることが必要です。

FLN は、小学校や中学校、大学のカリキュラムへの参入、彼らの質問や疑問に適切かつ継続的に応えることのできる場作り（一対一の手紙のやりとり、カウンセリングなど）、親や教師たちへの講習会、地域社会を巻き込んだメディア戦略などに取り組んできました。2006 年には、更に多くの子どもたちにメッセージを届けようと、友達から友達へ伝えていけるように青年リーダーへの訓練が行われました。半年間で 2,203 人が参加してくれました。また教師たちへのトレーニングにも力を入れ、381 人がカウンセリングなどの訓練を受けました。

子どもたちが、様々な因習やあらゆる情報に溢れた社会の中で「新しい価値観」を生きていくためには、何よりも、それを生きることへの励ましが必要です。FLN は、そんな「励まし手」として、また励まし手を生み出していくために、今日も労しています。

一週間のトレーニングを終えた、大学生の青年リーダーたち



一人一人は高価で尊い

首都ダッカ近郊のドゥムニ地区には、不可触民と呼ばれる「リシ」の人たちが暮らしています。国際飢餓対策機構は、リシの人たちがグループをつくり、一人一人が訓練されて、様々な問題に取り組む力をもった「村組織」を作っていくことができるように、支援を続けています。

リシの人たちの取り組む活動は多岐にわたります。グループ貯蓄を基礎とした収入向上活動、識字訓練、保健衛生や法的な権利の学び、収入向上のための技術訓練、良きリーダーシップの学びなどです。既に 818 人が識字訓練に取り組み、彼らが運営する 22 の地域図書館を 398 人のメンバーが利用し、276 人が収入向上のための技術訓練を受けました。経理について学んだ 17 人がグループの出納を、法律を学んだ 12 人が法律問題を担当するようになりました。教育を受ける機会を逸した若者たちに対して、非公式の初等教育も実施しており、既に 2 年目の勉強を終えた生徒は 28 人います。彼らは小学校 5 年生のレベルを目指して一日 3 時間、勉強を続けています。

スタッフは言います。「教育なくして、誰も変わることはできません。でも差別の中を歩んできたリシの人たちは、常に自分たちを下にみる周りの目によって、自分は価値が低いと信じてきま



した。教育に対して無力感や反感をもっている人も多いのです。リシの人たちが変わるためには、人々の自尊心の回復が、何よりも大切です」。

日々、グループの中で励ましあい、助け合い、小さな何かが成し遂げられていく中で、リシの人たちが「一人一人は存在価値があり、高価で尊い」ことを掴んでいってほしいと願います。

教育を受けられなかった女の子たちの識字訓練の様子。



子どもたちと共に未来を目指して

現在7ヶ国で世界里親会の働きが進められています。貧しさゆえに学校へ通えない子どもたちを対象に、全国の里親の方々と共に、全人的な成長を促す働きを進めています。



カンボジア

活動地域：カンボット州チューク地区（クレイン・モデン、トロピアン・ルーク）

2007年にはチューク地区での支援活動が終了します。地域リーダーに働きを引き継いだり、新たな地区での活動準備をしたりと、様々な動きが出てきました。

バングラデシュ

活動地域：ダッカ、マイメンシン（リシパラ、ハリジャンパリ）

2006年3月には日本から5名の里親の方々が里子を訪ねてくださいました。また、現地の方々と同じワークショップを受け、世界里親会の目指すところをより深く理解していただきました。



里子訪問ツアーの様子

フィリピン

活動地域：マニラ郊外（パラニャーケ、フェアビュー、ビッグバナナ、パリパラ）

2006年5月には、パラニャーケ地区で世界里親会の働きが終了しました。ここに住む子どもたちとそのご家族、コミュニティの人々とお別れをするのは本当に寂しいことですが、自立へのゴールに大きく前進できたことは大きな喜びです。



モザンビーク

活動地域：マロメウ地区ヴィラ

モザンビークのエイズ蔓延率は他のアフリカ諸国と比べても、非常に高くなっています。昔からの風習や誤った考え方から子どもたちを守るためにも、エイズの予防教育に力を入れなければなりません。

ウガンダ

活動地域：ブンタバ、ナマスンビ、キョガ、ミソンバ

子どもたちの人格形成、そしてエイズ予防を目的として、「子どもクラブ」が結成されました。子どもたちは心を開いて、お互いの考えや将来の夢を語り合えるようになってきました。

ペルー

活動地域：リマ（ビジャ・ドス・デ・エネーロ）、プカルパ（ロス・プロセレス）

小さな子どもたちと一緒にプログラムに参加しながらいない里子たちも出てくるようになりました。大人になる前の青少年には、小さな子どもたちのお世話をさせること、特別な任務を与えることなど、彼らに特別な責任を持たせることで青少年の育成を図りたいと思います。

ポリビア

活動地域：チャヤ

2006年3月から、農業アドバイザーでもある河合朝子スタッフが世界里親会の働きに携わることで、子どもたちも、野菜やクイの飼育などに取り組むようになり、更なる成長の機会となっています。



野菜栽培に取り組む子どもたち
(ポリビア)



共に暮らし、共に考え、共に歩む

飢餓・貧困の只中に生きる人々が自立への努力を続けていくためには、共に歩む励まし手が必要です。日本国際飢餓対策機構の海外スタッフたちは、そんな励まし手・同労者として、人々に仕えるために送り出されています。この年も、皆様と「チーム」となって、共に労させていただけましたことを心より感謝をいたします。

回 帰国スタッフ

●森田哲也（エチオピア／プロジェクト・コーディネーター）



2001年4月～2006年3月18日帰国

（*1997年11月～2000年9月／ニカラグア駐在）

エチオピアの3活動地（メタロビ、オーデイト、サシガ）を中心に、主にプログラムの基盤作り（地域調査、スタッフ雇用など）や活動コーディネイト、スタッフへのアドバイスに尽力しました。

●藤倉恵子（ボリビア／世界里親会コーディネーター）



2003年6月～2006年3月2日帰国

ボリビア西部アンデス高原の標高4,000mに位置するチャヤ地区にて、「世界里親会」の働きを通して、子どもたちが基礎教育を受け、全人的に成長していくことを支援しました。

回 新着任スタッフ

●青山亜紀子（エチオピア／2006年2月20日出発）

東部ソマリ州ジジガ／エイズプログラム・アドバイザー



●高橋ゆかり（エチオピア／2006年2月20日出発）

サシガ農村自立開発プログラム・コーディネーター



●朝夷佳光（ウガンダ／2006年3月19日出発）

世界里親会コミュニティ・プロモーター



◇ 2006年7月以降派遣スタッフ

島 幸晴（バングラデシュ／2006年7月）

竹内 緑（ルワンダ／2006年9月）

小西小百合（ボリビア／2006年11月）

現場スタッフを励まし、 助ける働き

カンボジア駐在スタッフ 吉田真記



モデル農家の野菜畑にて（吉田スタッフ：左から2人目）。「日本にいる時は、畑の畝に立てる支柱はホームセンターで買うものだと思っていましたが、ここではおじさん（右から3人目）が竹を割って、当たり前のように手早く作ってくれました」（吉田）

チュークで仕事を始めて一年がたちました。

国際飢餓対策機構カンボジアは、チューク郡（「チューク」とは植物の“蓮”の意味）で、次の4つのプログラムを行っています。「農業」「水・衛生管理」「里親会」「村リーダー育成」です。スタッフは全員で64人います。その中で、私が属する農業プロジェクトには、私の他にカンボジア人が8人働いています。

私は、この農業プログラムのアドバイザーという肩書きです。8人の手助けをするのが役割です。村人の手助けをしている現場スタッフと、現場スタッフの手助けをしているマネージャーと私、という関係になります。具体的には、現場スタッフの技術向上のために情報収集・紹介をしたり、時には現場スタッフに同行してモデル農家を訪問、また時にはマネージャーと共に書類作成に頭を悩ませます。しかし、カンボジアに来た最初の年は、聞いて、見て、習うことが主な仕事でした。

私たちスタッフは、自分の利益・地位のためや、また国際飢餓対策機構の組織のためにはではなく、貧困の中にある一人一人のために働きを進めているわけですが、しかしそれは時に簡単なことではありません。それをスタッフたちがしていけるようにお手伝いをするのが、私の役割であり、日常行う仕事の土台となっています。どのようにお手伝いするのがよいかと模索することに、多くの時間がかかってしまいます。この仕事のために知恵が与えられるようにと思います。（「支援者への手紙」より／2005年7月）

※吉田スタッフは2006年2月からは、農業プログラムに加えて保健衛生教育プログラムにも携わっています。

海外で奉仕を目指す人のために

日本国際飢餓対策機構が活動する国々において、人々と共に生活しながら現地で奉仕をしたい、あるいは飢餓問題の原因は何なのかを深く学びたいと願っておられる方々のためのトレーニングです。毎年、春と夏の2回、開催されています。

【第21回】

2005年8月8日(月)～13日(土)

グレース宣教会・紀勢会堂(三重県)

参加者：6名

【第22回】

2006年3月20日(月)～25日(土)

東京キリスト教学園(千葉)

参加者：11名



講義では「飢餓の現状」「開発とは」「活動理念」「緊急援助理念」「海外スタッフになるための準備」「活動地での生活」など、多岐に渡る学びを行います。

課外活動では、日本での支援の現場で学びます。写真は、路上生活者への支援を行う方々との懇談の様子。



国際協力の第一歩は知ることから

国際理解のひとつのステップとして、2005年も7月～8月にかけて、海外の活動地においてワークキャンプを実施しました。(なお、愛知万博出展のため、アフリカでのキャンプは開催しませんでした)

中国・雲南省スタディキャンプ

日程：7月25日(月)～8月6日(土)

参加者：4名

内容：雲南省最北端・ディーチン・チベット族自治州内の活動地のひとつ・ヤンラー地区を訪問。中上・星野両スタッフと行動を共にし、現地で行われている自立開発協力の難しさや課題を学びました。村に至る山道が土砂崩れで通行不能になるなどの不測の事態はありましたが、現地スタッフの日々の苦勞を実感する時ともなりました。



チベット族の子どもたちと共に。

アジア

ペルー・ワークキャンプ

日程：8月18日(木)～30日(火)

参加者：10名

内容：世界里親会支援地であるビジャ・ドス・デ・エネーロの幼稚園の修復作業をお手伝いしました。コンクリートの運動場建設、それに伴う校舎の移設、さらに子どもたちが崖から落ちないように柵作りを行いました。地元のお父さんやお母さん、子どもたちと楽しく作業をすることができました。



作業を通して、地元の子どもたちとも触れ合うことができました。

中南米

理念の共有から始まる働き

民間の国際協力団体（NGO）として、草の根協力を大切にしてきた当機構は、1981年の設立当初から、海外での働きの推進と共に、国内での啓発活動を重要と考え、毎年、様々な場所でお話しする機会を与えていただいています。

これは国内のNGOとしては、特筆すべきことという評価をいただいています。それは日本国際飢餓対策機構の働きの理念を理解していただいた上で、協力のひとつの表現としての募金をいただきたいと思ってきたからです。海外で飢えに苦しんでいる人がいてかわいそうというだけでなく、自分の大切なものを他の人と分かち合っていくという思いでこの働きに関わっていただきたいと願ってきたからです。

講演活動は、日本の私たちの生き方・生活を、もう一度見直すきっかけとなり、多くの方に支援していただく第一歩となってまいりました。この一年間も、延べ543回（集会396、学校講演147）、延べ出席人数46,420人で、当機構の働きの理念をお伝えするメッセージを届けさせていただきました。



中学校での講演の様子

当機構・親善大使のお二人
⑤上原合子さん ⑥森祐里さん



4万2千人の「世界食料デー」

国連が提唱している「世界食料デー（10月16日）」。当機構としては毎年9月から11月までをキャンペーン月間として、全国で講演や現地報告、一食募金の呼びかけなどで、世界の食料問題を皆で考えようという取り組みをしてきました。

一般的には地味な取り組みですので、関心を寄せていただき、大会や集会に足を運んでいただくということは必ずしも容易なことではありません。しかし、全国各地で、この取り組みに自発的に関わり続けて下さる方々によって実行委員会が起こされ、30近くの大会が継続的に開催され、また募金は毎年2,000万円近くも寄せられています。

昨年は、29大会に3,678人が足を運んでくださいました。また、大会を通しての募金とそれ以外の募金を一食募金（一口500円）に換算すると、4万2千人もの方々が参加して下さったことになります。引き続き、この「世界食料デー」の意味と大切さを日本の誰もが知る日を目指していきたいと願っています。



現地報告を行う小崎スタッフ
④（ウズベキスタン）、竹内ス
タッフ⑤（エチオピア）

第8回 世界食糧デー寒川大会

日本国際飢餓対策機構



寒川大会（神奈川）の様子



愛知万博「地球市民村」の最終月に出展

2005年3月25日から9月25日まで開催された愛知万博で、日本国際飢餓対策機構は、NPO、NGOが毎月5団体ずつ参加する「地球市民村」の9月組として、25日間、パビリオン「いただきますの未来館」とワークショップホール「63億人の食卓」の出展をしました。

「からだの飢餓とこころの飢餓」をコンセプトに、出展計画とプログラム作りを行いました。「飢餓の現実と日本の私たちの生活とのつながり」をわかりやすく伝えるために、パビリオンでは体験型の



小パビリオン「いただきますの未来館」

展示物を制作。来場者は予想をはるかに超える3万4千人以上となりました。またワークショップホールでは本物のパンを使った参加型の体験プログラムを開催しました。一回30分程度で、開催期間中・計98回、参加人数は2,872人でした。何よりも、初めて飢餓の現実に触れて下さる方々が多くおられたことで、この

地球市民村への参加が意味あるものとなりました。

また野外ステージでは、当機構の協力者である様々なアーティストの方々がコンサートやミュージカル、劇などを通して、地球市民村を盛り上げてくださいました。

この出展のために捧げていただいた、多くの方々の人的、時間的、財的なご支援を心より感謝をいたします。



▲一人一人の協力で完成した「美しい世界」の壁画



募金活動 広がる草の根の協力

◆ ミニ・ラビング募金箱 登場!

ご家庭や個人で使っていただくためのラビング (love...ing) 募金箱は、これまでの牛乳パック型 (高さ約10cm) の他に、ミニ・ラビングが作成されました。ぜひご活用ください。



また地球型募金箱は、会社やお店、病院、学校など公共の場に置いていただくためのものです。今年度は万博で協力して下さったスポーツ用品会社が全国の80以上の店舗に設置してくださいました。

◆ 書き損じハガキ収集

使用済みテレホンカードは引取り終了

書き損じハガキ、テレホンカード共に、海外スタッフ派遣のために使わせていただきました。

テレホンカードは、これまで集めたものを収集家の方に引き取っていただき、募金によって海外スタッフ派遣の動きを応援していただけてきました。しかし収集家の方の取扱い終了、加えて近年のテレホンカードの使用量減少という状況から、2006年7月末日をもって引取りを終了することとしました。なお収集開始1996年からの累計支援額は1,789,900円となりました!

● テレホンカード

27,500枚 (¥27,500 / 2005年7月～2006年6月)

● 書き損じハガキ

9,229枚 (¥392,839 / 2005年7月～2006年6月)

◆ ホームページ <http://www.fhi.net/jifh/>

ホームページへのアクセス件数は、一日平均180件ですが、ホームページからのメール送信も、会員の申し込み、質問、問い合わせなど様々な件について多くの方々に利用していただいています。今後は、各国のプロジェクト報告のページを増やすなど、充実に向けて取り組んでいきたいと思っています。



学校や家庭でご利用下さい

視聴覚教材の貸し出しは無料ですが、送料のみ負担していただいています。ビデオは貸出期間は2週間、パネル・児童画の期間についてはご相談ください。

◇ 貸し出しビデオ

● 世界の子どもたち (7分/幼稚園以上/2003年)

ペルー、フィリピン、インドなど、極度の貧しさの中で生きる子どもや人々たちの現実を知り、なぜ今も飢餓で死ぬ人が1分間に17人もいるのか、世界の飢餓と貧困の原因と日本の私たちとの関係を考えます。

● 隣り人の叫び (16分/小学校高学年以上/1986年/文部省選定)

1985年100万人が餓死した時のエチオピアの映像、バングラデシュの栄養失調病棟で死に直面している子どもたちの姿を通して飢餓問題の深刻さとそのために私たちはどうしたらよいのかを考えます。20年前のビデオですが、今でも多くの場所で同じような飢餓の現状があり、「飢餓とはどのようなものなのか」を考えていただける作品です。

● エチオピアの人びとと共に (17分/小学校高学年以上/1994年/文部省選定)

1985年エチオピア大飢饉の際の緊急援助に始まり、その後10年にわたる自立への協力活動を、日本から派遣された3人のスタッフの活動を通して、国際協力のあり方を考えます。

● 愛が実を結ぶ時 (18分/小学校高学年以上/1999年/文部省選定)

1986年に始まった世界里親会の働きですが、当時の里子たちの、その後の姿を追いながら、里親のご支援がどのように届き、結実したかを描いています。

● 私たちの働き (21分/小学校高学年以上/2001年)

日本国際飢餓対策機構の基本的な活動の柱である緊急援助、自立開発協力、世界里親会、海外スタッフ派遣、国内啓発のそれぞれの働きを紹介し、当機構の目指すものをお伝えします。

以下のビデオもあります。

● 南のおともだちのために (16分/幼稚園以上/1990年/文部省選定)

● 共に生きる (18分/小学校高学年以上/1988年/文部省選定)

● 極貧のアンデスから (20分/小学校高学年以上/1990年/文部省選定)

● 翔べアンデスの子よ (19分/小学校高学年以上/1990年/文部省選定)

● 山岳ラオと共に (19分/小学校高学年以上/2002年/文部省選定)

● 明日輝くために (17分/小学校高学年以上/1988年/文部省選定)

◇ 貸し出しパネル

日本国際飢餓対策機構の活動地であるアジア、アフリカ、中南米の様子が見える写真、パネル、また「飢餓について」「食料問題について」わかりやすく表した文字パネルなどがあります。

◇ 国際児童画

フィリピン、バングラデシュ、ウガンダ、ペルーなど10数ヶ国で教育支援を受けている子ども達が、毎年テーマにそって描いたものです。2006年のテーマは「希望」。その他「遊び」「学校」「仕事」などが揃っています。各100枚前後。



◇ 国際協力カレンダー「地球家族」

世界6ヶ国の民間援助団体が共同制作しているものです。開発途上国の人々の暮らしぶりを、写真を通して紹介します。2006年度版は、ペルー、バングラデシュ、ガーナ、ニジェール、ベトナムなど12枚の写真です。26×36cm フルカラー 一部1,000円で頒布

◇ その他・書籍

● 絵本 「ゴンドールのやさしい光」 (日英対訳)

1985年のエチオピア大飢饉の際、スタッフの一人が出会ったおじさんと小さな女の子の交流を絵本にしたものです。本当の愛に気づかれます。

発行：自由国民社

絵：葉 祥明 文：みなみななみ 1,600円で頒布

韓国語版、中国語版も出版。またスペイン語版(DVD)もあります。



● まんがで学ぶ開発教育

「世界と地球の困った現実」

主人公みなみ君と一緒に、飢餓、貧困、環境破壊などの問題を学びます。

発行：明石書店 まんが：みなみななみ

編：日本国際飢餓対策機構 1,000円で頒布



支援活動一覽

アジア

バングラデシュ	19,623,282
世界里親会 / ダッカ、マイメンシン (リシバラ、ハリジャンバリ)	11,627,641
グループ活動プログラム (ゴノクトリ地区)	947,150
グループ活動プログラム (ダッカ近郊ドゥムニ地区)	591,740
小児専門病院、小児治療センター (ダッカ)	4,249,660
小児専門病院への粉ミルク支援	1,911,161
海外駐在 / 島 幸晴 支援	295,930
カンボジア	19,107,902
世界里親会 (チューク地区クレイン・モデン村、トロピアン・ルーク村)	6,042,812
里子への奨学金	51,712
水・衛生プログラム (チューク地区) WFD	2,352,670
指導者育成プログラム	522,255
海外駐在 / 木村力央・志保夫妻 支援	4,467,890
海外駐在 / 浜名基弘・マリヤ夫妻 支援	2,874,823
海外駐在 / 吉田真記 支援	2,795,740
フィリピン	580,199,688
世界里親会 (マニラ郊外バラニャーケ、フェアビュー、ビッグバケナ、バリバン)	7,603,410
里子の奨学金	86,236
地域開発プログラム (マニラなど)	177,705
養鶏プロジェクト (ラグナ)	249,787
医薬品寄贈及び輸送費 (ナガ)	572,082,550
中国	13,010,993
雲南省・地域開発プログラム (ディーチン・チベット族自治州)	2,481,266
雲南省・学校建設プログラム (ディーチン・チベット族自治州)	1,999,580
雲南省・竹工芸指導者育成プログラム (昆明)	2,451,034
海外駐在 / 中上幸三・敏子夫妻 支援	3,430,280
海外駐在 / 星野公寛・尚子夫妻 支援	2,648,833
ウズベキスタン	2,697,750
障害をもつ子どもたちのためのデイケアセンター (ペカバッド)	581,370
海外駐在 / 小崎敏志 支援	2,116,380
インド	251,295
芸術を用いた全人的教育プログラム (デリー)	251,295

アジア合計 634,890,910

アフリカ

エチオピア	28,063,649
エイズ・プログラム (ジジガ) WFD	9,926,600
農村自立開発プログラム (サシガ) WFD	7,661,510
フジテレビ「あいのり」との小学校建設共同プロジェクト(サシガ)	2,880,960
海外駐在 / 森田哲也 支援	2,354,210
海外駐在 / 青山亜紀子 支援	2,569,033
海外駐在 / 高橋ゆかり 支援	2,670,036
海外駐在 / 根本綾子 支援	1,300
ウガンダ	15,394,660
世界里親会 (ブンタバ、ナマスンビ、キョガ、ミソソバ)	11,760,070
エイズ・プログラム (カンバラ)	1,733,740
海外駐在 / 朝夷佳光 支援	1,900,850
モザンビーク	4,287,310
世界里親会 (マロメウ地区ヴィラ)	4,287,310
ルワンダ	4,208,750
「子どもだけの家族」支援 (ギタラムなど) WFD	1,748,990
海外駐在 / 竹内 緑 支援	2,459,760
スーダン	2,945,890
食料支援プログラム (南スーダン) WFD	2,945,890

アフリカ合計 54,900,259

中南米

ペルー	10,985,842
世界里親会 (リマ、プカルバ)	6,636,160
指導者育成プログラム (リマ、プカルバ)	285,500
世界里親会準備金 (リマ)	619,327
トイレ設置プログラム (リマ)	510,435
保健衛生プロモーター育成プログラム (リマ)	454,820
保健衛生プロモーター育成プログラム (プカルバ)	343,590
幼稚園・補修費用 (プカルバ)	126,911
海外駐在 / 勢井美世 支援	2,009,099
ボリビア	11,442,141
世界里親会 (チャヤ)	4,810,159
寄宿舎建設 (チャヤ)	225,620
学校給食プログラムおよび学校寮運営 (チャヤ)	827,126
学校教材購入 (チャヤ)	100,014
海外駐在 / 藤倉恵子 支援	2,239,244
海外駐在 / 河合朝子 支援	2,534,520
海外駐在 / 小西小百合 支援	705,458
コスタリカ	15,950,821
医薬品 (ベッド、シーツ、タオル)、乾燥スूपなど寄贈及び輸送費	15,950,821

中南米総計 38,378,804

その他

国際飢餓対策機構サービスセンターの働きのため	10,800,815
アジア・アフリカ・中南米 / 活動コーディネートのため	6,732,350
プログラム管理費	2,337,450
指導者育成プログラム	9,391,060
開発途上国全般の開発援助として	49,263,305
国際飢餓対策機構マレーシア啓発活動支援	100,000
阪神大震災・被災者復興支援 (作業所「生活愛」のため) など	751,600
海外駐在 / 柳沢美登里 支援	3,424,048

その他合計 82,800,628

緊急援助

緊急援助活動のために WFD (インド・グジャラートの洪水被災者のため、ルワンダおよびブルンジ難民のため、インド南部洪水被災者のため、ベトナムの旱魃被害のため、インド北部の寒波被害のため、パキスタン地震被災者のため、ケニア北部の旱魃被害のため、ルーマニア洪水被災者のため、インド・ケララ州モンスーン被害のため、など)	5,895,440
パキスタン地震被災者救援	7,115,683
レイテ島地滑り被災者支援 (缶かんフレッド物資代、チーム派遣費)	2,276,957
ジャワ島震災被災者・緊急援助 (シェルターボックス、チーム派遣費)	5,223,416
アメリカハリケーンカトリナ緊急援助支援	1,161,800

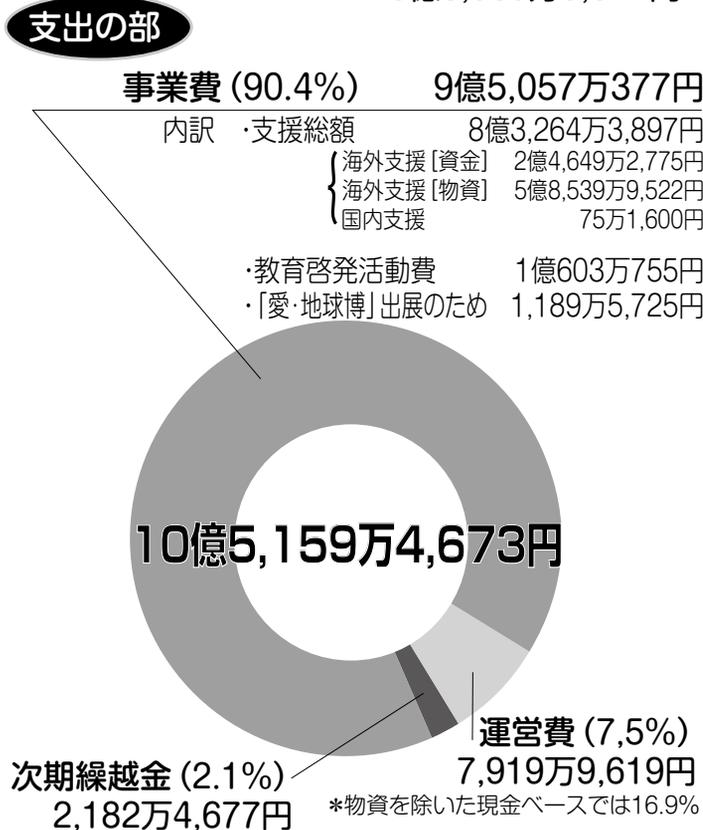
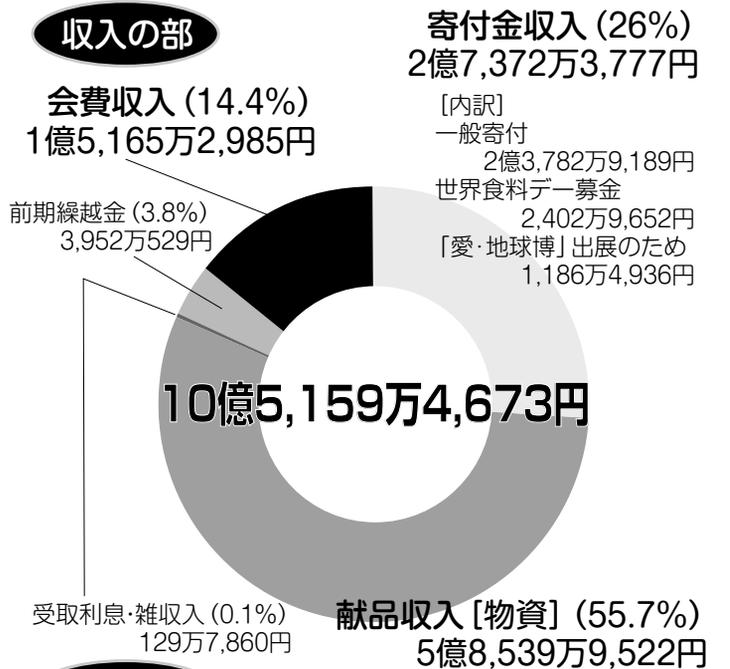
緊急援助合計 21,673,296

支援合計 832,643,897

*数字の単位は全て円です。

*現地駐在スタッフの支援金には、年金・海外旅行傷害保険などを含んでいます。

* **WFD** の印のついたプログラムの一部には、2005 年度の世界食料ドナー募金が充てられました。



監査報告書

日本国際飢餓対策機構
理事長 堀内 顕 殿

私たち、監事 舟橋 弘 及び 朝倉 章 の兩名は、日本国際飢餓対策機構の2005年7月1日から2006年6月30日までの第24期会計年度、収支計算書、正味財産増減計算書および貸借対照表を監査いたしました結果、適法かつ正確であることを認めます。

2006年7月27日

監事 朝倉 章

監事 舟橋 弘

【支援者数内訳】

※ 2005年7月～2006年6月の募金受付分
※ 数字は個人・団体・グループを含みます

- JIFH 会員として 2,199 名
- 世界里親会会員として 2,301 名
 賛助会員として 689 名
 (里子数 2,523 名)
- 各海外スタッフ支援として 1,457 名
 IVS 会員として 1,118 名
- 一般寄付者として 7,471 名



日本国際飢餓対策機構は国際飢餓対策機構（Food for the Hungry International: 略して FHI）のパートナーとして、1981 年から共に活動してきました。

FHI は、1971 年から緊急援助、自立開発協力等に携わってきた非営利の民間団体です。その働きは人々の物心両面の飢餓に伝えようとするもので、アジア、アフリカ、中南米の 43 の開発途上国で活動が進められています。開発途上国でのプログラムに協力し、経済的に支えるのは、カナダ、イギリス、アメリカ、韓国、スイス、スウェーデン、香港、タイ、コスタリカ、マレーシア、日本といった国々です。働き全体の調整作業は、バンコクに在る国際サービスセンターが、各国の情報を交換しながら担当しています。

FHI は、「もてる国」から「もてない国」への援助活動という関係ではなく、相互の自主性を尊重し、協力しあいつつ「善い隣人になって共に生きる」関係を目指して活動しています。そのような生き方をする人々が、現地活動地はもとより、パートナー国内においても増えていくことが、FHI 全体の願いであり、目標です。

現在この働きのために、上記の活動地で 1,835 人のスタッフが働いています。

2005 年	
7月	ホープ・アカデミー校（インド）への支援終了
	ワーク・キャンプ実施（中国）
8月	第 21 回オリエンテーション・トレーニング開催（三重県にて）
	ワークキャンプ実施（ペルー）
9月	愛知万博「地球市民村」出展 1日～25日（バビリオン、ワークショップ）
	理事会
10月	「世界食料デー大会」スタート。全国 29ヶ所で開催。現地報告は藤倉恵子（ボリビア）、小崎敏志（ウズベキスタン）、竹内緑（元エチオピア）、奥村いずみ（元カンボジア）
11月	エチオピア、ウガンダ視察研修旅行実施
	パキスタン地震被災者緊急援助のために、竹内緑（看護師）、奥村いずみ（薬剤師）スタッフを派遣。
12月	クリスマス募金「守れ！子どものいのち～エチオピア・サシガ農村自立開発プログラムのために」アピール
2006 年	
1月	中国・カンボジア活動視察（酒井保、鶴浦弘敏）
2月	高橋ゆかり（プログラム・コーディネーター）エチオピアへ派遣
	青山亜紀子（エイズプログラム・アドバイザー）エチオピアへ派遣
3月	春の特別支援「ルワンダ：がんばれ！子どもだけの家族」アピール
	第 22 回オリエンテーション・トレーニング開催（千葉）
	世界里親会 バングラデシュ里子訪問ツアー
	朝夷佳光（世界里親会コミュニティ・プロモーター）ウガンダに派遣
	森祐里さん エチオピア視察ツアー参加 親善大使として活動開始
	森田哲也（エチオピア駐在）5年間の働きを終えて帰国
	パキスタン地震被災者緊急援助のため酒井保、石田敏隆スタッフを派遣
理事会	
4月	竹工芸指導者育成プログラム 中国雲南省昆明市にて実施（八木澤正・洋志、辻本清臣）
5月	フィリピン レイテ島地滑り被災地およびミンドロ島での世界里親会の働きの視察（有江健・山本和弘）
6月	ジャワ島地震緊急援助のため、清家弘久総主事、酒井保スタッフを派遣
	藤倉恵子（ボリビア駐在）3年間の働きを終えて退職
	森田哲也スタッフのエチオピア活動報告会「エチオピアの風を感じる集い」開催（埼玉県所沢市の所沢ミュージアム アークホールにて）
	愛知万博に参加した市民団体の市民大交流フェスタに参加
理事会・評議員会	

その他、機関誌「飢餓対策ニュース」11回発行 年次報告1回発行

日本国際飢餓対策機構とは

【沿革】

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry 略して JIFH）は、非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年にひとりの日本人がインドシナ難民救援から帰国したのを契機に始まりました。

以来、国際飢餓対策機構（FHI）をパートナーとする他、国連諸機関、民間諸団体などと協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上にある、約40の国々で「世界の飢えた人々に食糧と愛を」を標語に、物心両面の飢餓対策にあたってきました。

【日本国際飢餓対策機構の目指すものは…】

- * 人々が、生活の基本的必要に満たされ、自立することに協力し、
 - * 自分の可能性を信じ、希望をもって生活し、隣人を愛する人になり、
 - * 「分かち合い、助け合う」共生社会を実現することです。
- このために、仕える者として国内外の支援・協力活動を行います。

【参加の方法】

活動の多くの部分は、会員の方々の定期的な会費や、随時の募金、募金箱によるご協力などで運営されています。

また国内においては、勉強会や講演会、ビデオやパネルのご利用、世界食料デー大会などを通して、地域の方々と共に国内の啓発・教育活動にも取り組んでおります。

●会員形態

● JIFH 会員

飢餓対策の活動全般を、継続的に支援していただきます。
日本を含める工業先進国の飽食の暮らしぶりを見直し、何かを節約した中から、開発途上国の活動のために支援をいただいています。
毎月一口500円から。

● 世界里親会

開発途上国の子どもたちが基礎教育を受けて健やかに成長していけるように、里親となって支援していただきます。
里子一人の支援につき、月額4,000円。

* 里親賛助会員

里子は指定されませんが、世界里親会の活動全般を支援していただきます。毎月一口500円から。

● 海外スタッフ支援

各国で活動するスタッフの働き全般を支援していただきます。
毎月自由額から。

* 海外ボランティアスタッフを支える会 (IVS)

スタッフを特定せず、海外スタッフ派遣の活動全般をご支援いただきます。毎月一口1,000円から。

● 一般寄付について

「今回一度だけ」「定期的にはできないけれど、出来るときに自由額で募金したい」「特に募金の指定先はない」そのような場合の募金です。その時点で、一番必要のある活動に用いさせていただきます。

● 指定寄付について

募金の用途先を指定していただけます。

● 機関紙について

会員の方々へは、当機構機関紙「飢餓対策ニュース」をお送りいたします。機関紙の購読料は会費に含まれております。ご希望いただければ、賛同者の方々へもお送りいたします。

■ 顧問

泉田昭、岡村又男、金子純男、山森鉄直

■ 理事

堀内顕（理事長）、墨鉦平（名誉理事）、岸好美（副理事長／運営担当）、倉沢正則（副理事長／経理担当）、野武興一、拜高真紀夫、木村雄二、丹波望、有江健（常務理事）、Randy Hoag（国際飢餓対策機構 [FHI] 国際総裁）

■ 評議員

工藤弘雄、田中隆裕、笠川徹三、麦野賦、千代崎聖子、比嘉幹房、田口博之、水野晶子、岩橋栄造（2005年10月末まで）

■ 監事

舟橋弘（公認会計士）、朝倉章（顧問税理士）

■ 海外スタッフ（2006年6月末現在）

【カンボジア】

木村力央・志保
浜名基弘・マリヤ
吉田真記

【中華人民共和国】

中上幸三・敏子
星野公寛・尚子
八木澤啓造（特別講師）

【ウズベキスタン】

小崎敏志

【エチオピア】

高橋ゆかり
青山亜紀子

【ウガンダ】

朝夷佳光

【ペルー】

勢井美世

【ボリビア】

河合朝子

【アジア地域】

柳沢美登里

【派遣準備スタッフ】

島幸晴（バングラデシュ）
竹内緑（ルワンダ）
小西小百合（ボリビア）

■ 職員（2006年6末日現在）

【開発・教育部】

東京：神田英輔（総主事）、辻本清臣（特別顧問）、須山弘子（主任）
半田智英子、石田敏隆、奥村いずみ
沖縄：太田留美子
広島：田村治郎、千代崎満子

【国際協力隊】 *すべて大阪

清家弘久（総主事）、酒井保（主任）、松島育子

【世界里親会】 *すべて大阪

有江健（総主事）、橋本江里子、山本和弘、西川和子

【事務局】 *すべて大阪

有江健（総主事兼任）、高橋献一（主任：会計担当）、武内麻倫亜
鶴浦弘敏・西本玲子（広報担当）、西川真一、中井佐起子